
詩の学習指導について

綾坂・白峰中 赤松 郁実

1 はじめに

他教科に比べ、国語の読み取りは正解が分かりづらい。国語の答えは円形のものである。中心に位置する核心の答えはあるのだろうが、どこまでを許容範囲として線引きするのは、教師の判断にゆだねられる。さらに、詩の解釈は、より多様さを極める。散文ならば根拠となる表現が多くあるが、限られた文字数で書かれた詩の読解は、読み手の想像力に頼ることになるため、自分の考えに自信がない生徒が生まれるのではないだろうか。そのため、詩を読むことの学習指導法について考え、次年度の授業に生かすきっかけにしたい。

2 主体的に深く読むために

(1) 教材から自ら問いを見出す

自ら立てた学習課題があることで、主体的に学ぶことができると考える。そのためには、教材文から生徒が問いを見出す力が必要である。

詩の学習に当たっては問いを見出す前提として、繰り返し音読をして詩に慣れること、基本的な読み取りに必要な言葉の意味や表現技法を押さえることが必要である。これを踏まえて学習を進める中で、読み取りづらい言葉や、再考すべき言葉が浮き彫りになり、問いが見い出される。

(2) 言葉と言葉、言葉と自己を関連付ける

川田英之は「国語の学びは自己と言葉の世界との関係を「私」で捉えていくこと、すなわち主体的な自己が言葉とかかわっていく中で自己を理解していく過程であり、自己の学びを自己の言葉で語り表現することです」と述べている。

教材を読む過程で主体的に自己との関わり

を意識付けることによって、詩の世界を深く読み味わうことができる。

3 主体的に深く読む詩の授業構想

(1) 教材について

中学校3年生「生命は」（東京書籍）を題材にして授業を構想する。この詩は、自分の生命を支えているのは自分だけでなく、人間は知らず知らずのうちにお互いの人生を手助けする存在になり得るのだという内容である。

(2) 主体的に深く読むための工夫

まず、自ら問いを立てるために、想像しやすい表現としづらい表現を分ける活動を行う。これによって、「虫や風が仲立ちする」という擬人法の表現や、「私が虻である」という隠喩の解釈が学習課題につながる。

また、言葉と自己を関連付けて読むために、次の発問を考えた。詩の一節である「私は今日、どこかの花のための虻だったかもしれない。そして明日は誰かが私という花のための虻であるかもしれない」に注目し、(1)生徒自身が「私」の場合、「花は何か。」(2)生徒自身が「花」の場合「虻は何か。」この二点を問うことで、生徒自身が詩の読みに主体的に関わり、自己と関連付けながら、詩の世界を読解できる。しかし、この発問では、「知らず知らずのうちに」人生を助けるという解釈には到達しない可能性がある。そのため、詩の前半部に注目し、「花」が生徒自身だった場合、自分の生命を満たす「虫や風」は何かを問うことで、虫や風が意思をもたずに手助けする存在であることに気付く生徒が出てくると考える。

以上のことを踏まえ、次年度以降に授業実践と改善を行いたい。

4 引用文献

川田英之 (2016) . 『自己の「物語り」をつむぐ国語授業—主体的・共同的な言葉の学びをつくる—』 東洋館出版社